

するとたぬきの子は気の毒そうにして、またしばらく考えていましたが「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一回ひいてくれませんか。」「いいとも、もう一度ひくよ。よく聴いていておくれ。」ゴーシュはひきはじめました。たぬきの子はさっきのようにトントンたたきながら、時々頭を曲げてセロに耳をつけるようにしていました。そして曲の終わりまでできた時は、今夜もまた東がボーッと明るくなっていました。「ああ、夜が明けたぞ。もう帰らなくちゃ。どうもありがとうございました。」たぬきの子は大変慌てて譜面や棒きれを背中へしょって、ゴムテープでパチンととめ

ておじぎを二つ三つすると、急いで外へ出て行ってしまいました。ゴーシュはぼんやりして、しばらく昨夜の壊れたガラスから入ってくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで眠って元気を取り戻そうと、急いで寝床へもぐり込みました。次の晩もゴーシュは夜通しへ口をひいて、明け方近く思わず疲れて楽譜をもったままうとうとしていると、また誰か扉をコツコツとたたく者があります。それもまるで聞こえるか聞こえないかの位の音でしたが、最近毎晩のことなので、ゴーシュはすぐ聞きつけて「お入り。」と言いましたすると戸のすきまから入って来たの